

〔研究ノート〕

学生が日常生活援助技術の状況設定事例演習において 得た学びのレポート分析

吉岡 陸世¹⁾ 窪川 理英¹⁾ 中溝 道子¹⁾
溝口 孝美¹⁾ 平尾 眞智子¹⁾

Analysis of nursing students' reports on a situation setting
seminar of techniques for daily support

YOSHIOKA Mutsuyo, KUBOKAWA Rie, NAKAMIZO Michiko
MIZOGUCHI Takami, HIRAO Machiko

抄 録

【目的】

1年次のナイチンゲールの看護の視点を取り入れた日常生活援助技術における状況設定事例演習で得られた学びを明らかにすることを目的とした。

【方法】

状況設定事例演習に参加したA大学看護学部学生1年次53名を対象に、大切だと思った援助の工夫や配慮について無記名の自由記述を依頼し、質的帰納的に分析した。

【結果】

257のデータが抽出され、74サブカテゴリー、11カテゴリーが生成された。カテゴリーは【生命力の消耗を最小に】【看護技術の工夫】【看護を実施する際の基本的な配慮】【プライバシーの保護】【人間の尊厳を守る】【患者との意思の疎通】【自分の気持ちを患者に寄せる】【看護師の体力の消耗を最小に】【看護計画の工夫】【学び】【演習で感じたこと】であった。

【考察】

学生は、既習内容からの知識、事前学習、演習前の講義により「看護とは対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整える」というナイチンゲールの看護の視点を意識し演習が行っていた。

キーワード：状況設定事例演習、日常生活援助技術、ナイチンゲール看護論、看護学生

1) 健康科学大学 看護学部 看護学科

I. はじめに

A 大学看護学部看護学科（以下 A 看護学科と記す）は平成28年4月に開学した。当該年度に入学した学生は、看護学教育について初学者であり、1年次前期から専門分野 I 基礎看護学（A 看護学科では「看護の基本」と表記）の看護技術（A 看護学科では「看護援助方法論 I・II」と表記）を学ぶ。

一方、文部科学省で示された看護学教育の在り方に関する検討会報告書でも「学生が自己の看護実践についての分析力、統合力を身につけるためには、技術の習得に焦点をあてた演習において学生が実際に体験する機会を多くし、体験の後には必ず振り返りを行うことが効果的である¹⁾とある。このようなことから、基礎看護教育のうちから実践能力を高められるような授業方法が求められている。また、看護教育の充実に関する検討会は、看護基礎教育課程におけるカリキュラム改正案を提示した。看護師教育には「学生の看護実践能力を強化すること²⁾が求められ、基礎看護学の内容については、「対象の理解と看護実践の基礎となる技術を修得する²⁾」「健康障害をもつ対象を理解し、状態に応じた看護について学ぶ内容とする。その具体的な方法として、事例に対して、看護技術を適用する方法の基礎を学ぶ²⁾と示されている。

以上のことから、基礎看護教育のうちから実践能力を高められるような授業方法が求められている。そのため1年次前期に開講する「看護援助方法論 I」では、最終単元に「日常生活に伴う統合技術①②」を置いている。この単元は、学生が具体的な事例の状況を踏まえ、複数の看護技術を用いた日常生活援助技術が考えられ実践できるよう意図している。しかし看護学教育の初学者である学生は、それまでの単元において、一つ一つの基本的な看護技術の手技や手順の修得を優先することが予測された。そのため、学生が主体的に看護を計画し、かつ既習の学習内容を統合して考えられるよう状況設定事例演習の内容を工夫した。この効果を明らかにし、来年度からの授業に活かしていきたいと考えた。

また状況設定事例演習では、看護を考える際の根拠として「看護とは対象の生命力の消耗を最小にするように整える³⁾というナイチンゲールの看護の視点を意識させながら演習を行なっている。よって、本研究ではナイチンゲールの看護の視点についても分析対象とした。

先行研究では、日常生活援助技術の技術習得方法について検討するという研究⁴⁾がある。また状況設定事例演習に関する研究は、診療の補助技術演習の研究⁵⁾、卒業前に行う統合技術演習時の研究⁶⁾がみられる。しかし、1年次における日常生活援助技術の状況設定事例演習について検討されている研究⁷⁾は少なく、ナイチンゲールの看護の視点を取り入れた演習の研究は見当たらなかった。

今回の研究では、ナイチンゲールの看護の視点を取り入れた日常生活援助技術の状況設定事例演習で学生が学んだ内容を明らかにすることで、今後の日常生活援助技術の状況設定事例演習に役立てたいと考える。

II. 研究目的

1年次のナイチンゲールの看護の視点を取り入れた日常生活援助技術における状況設定事例演習で得られた学びを明らかにする。

III. 用語の定義

ナイチンゲールは「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えること—こうしたことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること、を意味すべきである」³⁾と述べている。この記述について、ナイチンゲール看護論研究者である薄井氏は「看護とは、生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えること」⁸⁾と解釈している。このことから、生活過程を次のように定義する。

看護師が日常生活を援助する場合において、ある日常生活の一部だけでなく患者が暮らしている全てを包含した日常生活のあり方を「生活過程」とする。

IV. 授業の概要 (図1)

事前課題として、状況設定事例を提示した。この事例は各単元で学習してきた複数の技術を考えられる点、羞恥心が大きく、相手の立場に立って配慮を考えなくてはいけないという点から、老年期の尿失禁患者 A さんとした。問いは「看護とは対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整える」に照らして、どのように援助したら対象の生命力の消耗を最小にすることができるかを考える、とした。また、以下の1)から3)を考慮し、看護を考えるよう事前課題を提示した。1) A さんを整えるのに、今まで学習した技術からどのような技術項目が必要か抽出する。2) どのような言葉がけをすればよいか、具体的に記述する。3) 援助の順番を押さえて、対象の安全・安楽・自立を考え、一つ一つの技術を確実に実施する方法・留意点を導き出す。授業の開始にあたり、「看護技術総論」を想起できるよう講義した。

グループワークは、事前学習で考えてきた援助計画をグループで一つにまとめ、各グループ計画を発表し、その後、質疑応答、学生及び教員から助言をもらった。後半2コマで、各グループ解説を加えながら実演し、質疑応答、学生及び教員から助言をもらったうえで修正した。

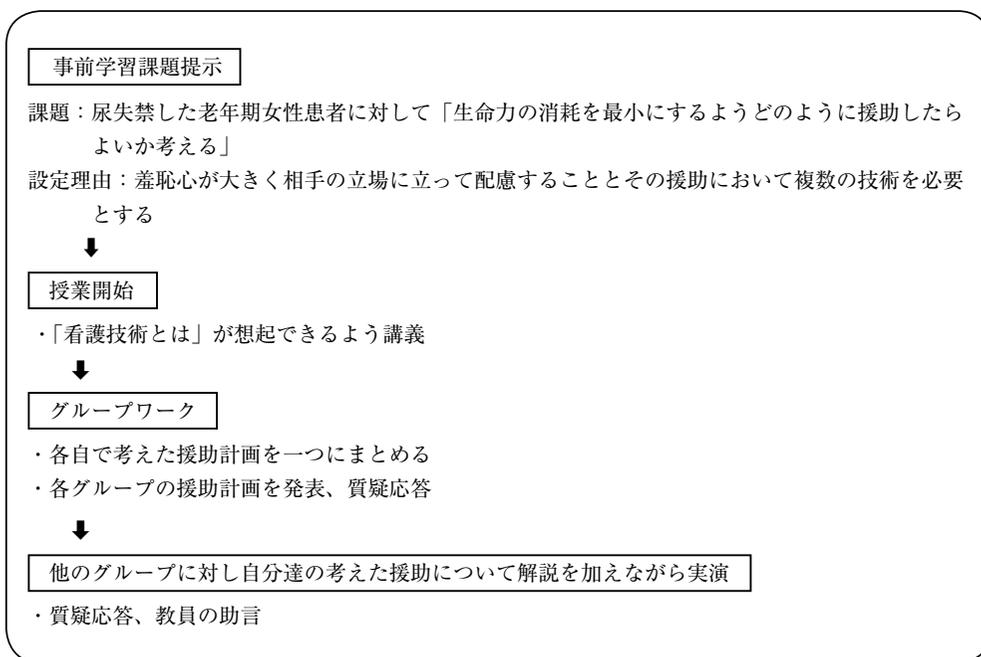


図1 授業の概要

V. 方法

1. 対象

状況設定事例演習に参加した A 大学看護学部学生 1 年次53名

2. データの収集場所

A 大学看護学部の学部内講義室

3. データ収集時期

2016年10月

4. データ収集方法

データの収集は、2016年度に開講した基礎看護学の看護技術授業における状況設定事例演習の授業終了後に実施した。状況設定事例演習後、学生に「今回の『状況設定事例演習』で、大切だと思った看護援助の工夫や配慮について」という問いに対し、自由記述を依頼した。

5. 分析方法

このレポートの記述内容を質的帰納的に分析した。分析の手順は、レポートの内容を繰り返し読み、素データから問いに対する回答が記述されている箇所について文脈を損なわないように抽出した。次に抽出した記述部分について、意味内容が損なわれないように要約し、一つのデータとした。データの類似性に基づき集約し、サブカテゴリー・カテゴリー化を行った。

信頼性と妥当性を確保するため研究者 5 名の意見が一致するまで繰り返し分析を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は、健康科学大学研究倫理委員会による承認を得て実施した。(承認番号第19号) 研究協力の依頼は演習の終了後に行い、演習中に不利益を被らないよう配慮した。説明は、担当科目の評価に関係しない研究責任者が実施した。

研究対象者には、本研究の目的、方法、期待される結果、研究参加の自由、データ処理や研究中、発表においてのデータの管理及び匿名性の保障、授業評価に影響せず不利益を受けることは一切ないことについて、文書及び口頭で説明した。回収箱は研究者の視界の届かない場所に設置し、投函をもって同意が得られたとみなした。

本研究発表に関連して、開示すべき利益相反はない。

VI. 結 果

配付した53部のうち、回収されたレポートは51部で回収率は96.2%であった。

この研究では、「今回の『状況設定事例演習』で、大切だと思った看護援助の工夫や配慮について自由に書いてください」という自由記述にしている。よって、質問文中の問い「今回の『状況設定事例演習』で、大切だと思った看護援助の工夫や配慮について」以外の記述部分も分析対象とした。分析対象となった51部の記述を類似性で分類した結果、257のデータが抽出され、これらを分析対象とした。

その結果、74サブカテゴリー、11カテゴリーが生成された。代表データとともに表1に示す。以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、データを〈 〉で示す。

1. 【生命力の消耗を最小に】は、患者が最も負担の無いよう意図して行なう看護援助の工夫や配慮である。《体位変換数を少なくする》《時短》《援助前に物品を扱いやすいように揃えておく》《援助前に手順をイメージしておく》《患者の動作の工夫》《物品の使用法の工夫》《衣服の工夫》《患者の体力の低下を怠らない》の8サブカテゴリーで構成された。
2. 【看護技術の工夫】は、学生が患者に看護援助を提供する際、手技の工夫や配慮である。患者に直接行う手技だけでなく、手技の工夫や配慮により結果的に患者の為になっている手技も含まれている。《保温》《清潔》《環境整備》《物品の位置》《ボディメカニクス》《準備性を高める》《適温調整》《臭いへの配慮》《患者の持てる力を利用する》《スタンダードプリコーション》の10サブカテゴリーで構成された。
3. 【看護を実施する際の基本的な配慮】は、それまでの日常生活援助技術演習で学んだという点を踏まえて記述されていた患者への配慮である。既習学習内容であることを意図していない記述は含まれていない。《安全への配慮》《安楽への配慮》《安心への配慮》《準備性を高め患者が安心するケアの提供》《患者の自立促進》《羞恥心への配慮》《嫌悪感を与えない配慮》の7サブカテゴリーで構成された。
4. 【プライバシーの保護】は、看護援助を行なう際に患者のプライベートな内容について配慮を行なうことである。《プライバシーの保護》《性別を意識したプライバシー

表1 学生が援助の工夫や配慮について大切だと思った内容

カテゴリ (11)	サブカテゴリ (74)	代表データ(全データ数:257)
生命力の消耗を最小に (21)	体位変換数を少なくする	9 体位変換の回数を減らし、患者さんに負担をかけないようにする。
	時短	3 そして何より患者の体力を最小におさえるためにできること時短をする中で、いかに患者の負担も少なく援助をすることが大切かということが改めて分かりました。
	援助前に物品を使いやすいように揃えておく	2 物品を後に取りに行くことのないよう、物品から揃えておくことで患者への負担が少なくなるのではないかと思った。
	援助前に手順をイメージしておく	2 患者さんのためにも素早く終わるためにはどうしたら良いか考えながら計画を立てていった。
	患者の動作の工夫	2 工夫については複数援助がある中で、どれだけ患者の動作を少なくして行なうことができるかに注目をおく。
	物品の使用法の工夫	1 患者さんに負担がかからないように、防水シートやバスタオルなどを最初に重ねて敷きました。そうすることで、患者さんの体位変換の回数を減らすことができるので、負担を抑えることができました。
	衣服の工夫	1 寝衣をパジャマにした理由としては、今後も失禁をする可能性があり、失禁した場合には下半身だけを交換すれば良い。これにより、浴衣よりも手短かに寝衣を交換することが出来る。
	患者の体力を低下させない	1 看護援助の工夫や配慮については状況が設定しているので、患者の体力を怠らないように工夫しました。
看護技術の工夫 (31)	保温	11 保温を怠らないように配慮しました。特に、最後に温罨法を入れたところは工夫した所だと思っています。
	清潔	6 陰部洗浄だけではなく、太もも等も尿で汚染されている場合のことを考えて全身清拭を行なうべきだと学んだ。
	患者の持てる力を利用する	3 患者さん自身のできるのであれば、看護師が援助をする必要は全くないと思う。
	スタンダードプリコーション	2 基礎であるスタンダードプリコーションについても、忘れずにしていかなければならない。
	環境調整	2 環境調整の部分にも私のグループでは工夫をしました。
	物品の位置	2 背中を向けなくて作業できる物品の位置を確認しておく必要があるなと思った。
	臭いへの配慮	2 「失禁」をしてしまい臭いかもあるので周囲に配慮した。
	適温調整	1 環境にも配慮することができた。(寒さ、暑さの確認)
	ボディメカニクス	1 ボディメカニクスをしっかり行なうことが、患者にとっても看護師にとっても大切になると改めて感じた。
準備性を高める	1 次に状況に応じた物品の準備、作業内容の把握ができておらず、対象者に対して、多大な時間を有してしまった。	
看護を実施する際の基本的な配慮 (33)	安全への配慮	13 患者の安全を第一に考えなければいけないと思った。私の班は何度かベッド柵をつけ忘れることがあり、もしも実際の現場であったならば、下手をすれば、大事故に繋がりがねないミスであるため、そういったことには特に注意していかなければならないと思った。
	安楽への配慮	7 安楽な体位を取ってもらえるような援助も行なうことができ、とても勉強になった。
	羞恥心への配慮	5 援助を始める前に失禁してしまった対象の気持ちを考えて、相手の反応をみながら声かけの言葉をかけるようにして行なった。
	安心への配慮	3 患者さんに対し看護師が作業中も側にいることで、安心させるようにしました。
	患者の自立促進	3 患者の自立を促すことも看護の一つであると考え、腰を上げる動作や、仰臥位から側臥位にする体位変換は協力していただいた。

学生が日常生活援助技術の状況設定事例演習において得た学びのレポート分析

カテゴリー (11)	サブカテゴリー (74)	代表データ(全データ数:257)
	準備性を高め患者が安心するケアの提供	1 湯の温度だったり使う器具の配置だったり、患者のケアをする時の準備が万端でなければ、安心な患者のケアはできないと思った。
	嫌悪感を与えない配慮	1 患者さんに対し看護師が作業中も側にいることで、嫌悪感を与えないようにしました。
プライバシーの保護(18)	プライバシーの保護	17 患者にとって恥ずかしいこと、他人には知られたくないと思うことがあると思う。やはりまずは、患者のプライバシーを一番に守ること。
	性別を考慮したプライバシーの保護	1 患者は、女性ということもあり、よりいっそうプライバシーの保護がされるようにした。
人間の尊厳を守る(3)	患者に敬意を払う態度	2 失禁をしてしまった患者に対する精神面でのケアが足りていなかったことを改善せねばならないと感じた。機械的な声かけでなく、“人として”接することを覚えなければならない。
	人権について	1 人権（最終決定権について）
患者との意思の疎通(42)	患者が安心するコミュニケーション	15 無言で援助を提供されてもすごく怖いので、声かけをすることで患者に安心感を与えることができると考えました。羞恥心やもどかしさを感じているので、顔をうかがい、声をかけて、安心感を与えることも大切だと思った。
	患者の気持ちを慮った声かけ	8 患者さんは失禁してしまったということで、恥ずかしいというような気持ちを持っていると思います。看護師は安易にその気持ちを想像して、「大丈夫ですよ」といった声かけをしてはいけないと思いました。(人は恥ずかしいことにはあまり触れてほしくないと思うと考えたので……。)
	コミュニケーション	5 患者さんの声だけでなく、表情や声のトーン、視線などに意識を置くなどコミュニケーションの大切さを実感しました。
	失禁した患者の気持ちを楽にする声かけ	3 患者さんは失禁をしてしまい、恥ずかしいという気持ちと不安な気持ちを持っていると思います。そのとき、一言でも気を楽にしてあげられるような言葉をかけてあげると良いのかなと考えました。
	看護師の声かけが患者の気持ちを左右する	3 どんな声かけ、コミュニケーションを行えば良いのかを考えました。声かけ1つで気持ちが楽になったり、不快な思いをさせてしまうためです。
	患者が思いを表しやすいような声かけ	2 患者さん自身の気持ちのあり方（どんな声かけをしたらどんな気持ちになるのか、次もまた援助してもらいたいと思ってもらえる声かけとは何か）を重要視した。
	患者に援助の説明をし安心感を与える	2 寝衣交換、下着交換、清拭、シーツ交換など次の行程を説明することで、患者に安心感を与えることができる。
	信頼関係を築く	2 コミュニケーションをとって、信頼関係を築くことが必要。
	患者の変化に気付ける	1 今何をしているのかや声をかけて返事をしてもらうことで、患者さんの状態の把握ができると思ったからです。
	看護師の思いが患者に伝わることを心にとどめる	1 私は患者役だったんですが、専門的な知識がなくても患者にはどのような援助や配慮ができていないなど伝わってしまう、と思いました。
自分の気持ちを患者に寄せる(39)	患者の状態の観察	13 患者の体のようすをしっかりと観察するという点で、背中や腕にアザや褥瘡などがないかなどの観察を行なう事が出来た。
	患者を思う気持ち	8 相手を思う心、思いやりの気持ち。
	患者に不快な思いをさせない	7 まずは、患者さんが不快に思うものを取り扱うことで患者さんを不快から守った。
	患者の立場に立つ	4 もし自分が患者だったらと、自分を患者の立場に置いて考えてみると見えてくるものが沢山あります。
	患者のことを一番に考える	3 私は看護援助を行なう上で、患者さんのことを第一に考えることが重要だと思っています。
	患者の全体に配慮する視点を持つ	2 全身に注意を払う。

カテゴリー (11)	サブカテゴリー (74)	代表データ(全データ数:257)
	患者の目線に立つ	1 患者の配慮については、体温が低くならないようにすること、プライバシーを保護することなど、患者の目線に立って考えることが何よりも大切であると思った。
	患者の持てる力は看護援助によって削がないこと	1 動作に適した筋群がつかえるところは使い、できないところは手伝ったりしながら行なった。
看護師の体力の消耗を最小に(10)	看護師の安楽に配慮したボディメカニクス	3 患者さんを援助していく中で看護師自身の負担も避けるため、ボディメカニクスの活用が重要になると感じた。
	援助時の作業効率	3 作業効率を良くするために環境を整える。
	援助時の効率性	2 手際よく行なえるように自分たちの中で防水シートともう1つの防水シートが隠れるように工夫して行ないながら、交換をしたことである。
	看護師の安全のためのボディメカニクス	1 看護自らの身体の安全のためのボディメカニクスも重要だと思った。
	援助時の看護師の安楽	1 患者さんのいいようにするのも大事だが、看護師側からも援助しやすいようにした方がいいと思った。
	援助は短時間で実施する	7 作業行程の短縮化など時間と患者さんへの負担を減らすことも大切。準備をちゃんとしていなかったために援助がしっかりと出来なかった。これで、現場に出たとき本当の患者さんにするとすると、とても患者さんに失礼になると感じました。
看護計画の工夫 (33)	優先順位	5 患者さんを援助する上で、1つ1つの援助の順序も、試行錯誤していく必要があると感じた。
	個別性のある看護	5 その人その人に合った援助を行なう。
	迅速な行動のための状況のイメージ	4 様々な状況を想定しておいてすぐに行動できるよう具体的に細かいイメージをしておくことが大切だと思った。次は何をするか患者にとってベストである方法はどのようなものか等。
	患者・看護師双方にとって良い看護援助を考えると	3 看護師の楽さを求めるのではなく、患者の安全や安楽、自立を深く考えていけたらなと思った。看護師にとって効率がよいものは患者さんにとって安楽につながるものが多いと思いました。患者さんの体位変換の回数が少ないということは、看護師は寝衣や横シートなどをまとめて着せたり、敷くことになるので、今の体位でできることをすべてやってしまう、というのも工夫につながると思います。
	基本的技術の習得	3 看護援助を工夫する前に、基本的なことをしっかりと押さえることがその後の工夫につながると感じました。
	情報収集とアセスメント	2 患者さんの状況を把握し、患者自身は、何ができるのか動けるのか看護師が知ることが大事だと感じました。声には出さないが、患者の尿の状態をアセスメントすることも可能となる。
	患者の状態に合わせた物品の選択	1 患者さんの体型や特徴によって物品が多く必要であったりするので、事前に患者さんに必要な物品を準備することが大切だと感じた。
	患者の反応により臨機応変な対応	1 実際の医療現場では、前もってやり方を考えてから援助を実施することはありません。そのため、コミュニケーションを通して援助方法を臨機応変に行なうことが大切だと思いました。
	丁寧な援助	1 一つ一つの行程を丁寧に行ない安全と安心・安楽を感じさせることが重要だと思った。
	本来の看護援助が終わった際の患者への配慮	1 援助の終わった後の声かけやお茶の提供など患者さんにリラックスしてもらう事。
	学び(15)	グループでの学びに気付く

カテゴリー (11)	サブカテゴリー (74)	代表データ(全データ数:257)
	他グループとの比較で自分達の援助を自己評価できる視点が育つ	5 他のグループの人からの参考になる意見や自分の考察を照らし合わせてみて、今回は、自分達なりの最良の援助を提供することができたのではないだろうか。
	対象者にとって「最良」の看護を提供する意識	1 対象者にとって「最良」を提供することを常に意識していきたい。
	全ての援助を看護師1人ですることの大変さ	1 1人だけで援助を行なうということはとても大変なことだと思った。
	患者の思いを確認することで自分の看護は患者の立場に立っているという確信がもてる	1 演習中患者役を行なったが(中略)自信を持って患者さんが不快を感じていないと思える看護を行なうべきだと演習を通して実感した。
	知識や技術は勉強すれば身につくが、心のケアの援助は経験が必要	1 作業行程や知識などは勉強すればおのずと身につくが、心のケアというモノはおのずとでは身につかないのである。
	人にしか出来ない看護	1 看護援助を行なう看護師に求められている配慮というものは、やはり「人」にしか出来ない事なのではないだろうかと考える。患者も人のために、声かけが必要となる場合は声をかける。会話が必要な場合は話しかけるといった判断が出来るのは看護師というよりも人にしか出来ないからである。人にしか出来ない安全・安心・安楽の看護を行なうことが看護師の仕事であるのだと考えた。
演習で感じたこと (12)	看護援助を考える自由度が増すことの難しさ	7 普段の演習とは違い、状況が設定されていたので尚更難しかった。患者さんのADLが詳細でないからこそ、自由に幅広い回答があり難しかったです。
	患者の笑顔と感謝をもらえずケア	3 当グループでは最後に患者さんの笑顔がみられるように“ごめんなさいね”ではなく“ありがとう”と言ってもらえるケアを目指しました。
	看護援助を考える自由度が増すことの楽しさ	1 自分達でどのように援助すればよいのが自由だったので、一人の患者さんに最良の看護援助を提供することを考え、色々なことを考察するのが楽しかった。
	他者に見てもらえた喜び	1 違う班に見てもらった時もそれをアピールできたし、気付いてもらえてよかったと思います。

カテゴリー内の()はカテゴリーを構成するデータ数

の保護》の2サブカテゴリーで構成された。

- 【人間の尊厳を守る】は、看護援助全般にわたり看護師が患者の侵してはならない領域を守り、看護援助を行なうことである。《患者に敬意を払う態度》《人権について》の2サブカテゴリーで構成された。
- 【患者との意思の疎通】は、患者に何らかの言葉がけを行なうことや何らかの効果期待を行なう意思疎通のことである。《患者の気持ちを慮った声かけ》《コミュニケーション》《患者に援助の説明をし安心感を与える》《患者が安心するコミュニケーション》《失禁した患者の気持ちを楽にする声かけ》《患者が思いを表出しやすいような声かけ》《信頼関係を築く》《患者の変化に気付ける》《看護師の思いが患者に伝わることを心にとどめる》《看護師の声かけが患者の気持ちを左右する》の10サブカテゴリーで構成された。
- 【自分の気持ちを患者に寄せる】は、基本的な患者への工夫や配慮ではなく、この事例患者の状況を自分が患者であったらと患者をよく観察し捉えた上で、実施する看護援助であり、状況によって対応が変わることを含んでいる。《患者を思う気持ち》

《患者の立場に立つ》《患者の目線に立つ》《患者のことを一番に考える》《患者の状態の観察》《患者の全体に配慮する視点を持つ》《患者に不快な思いをさせない》《患者の持てる力は看護援助によって削がないこと》の8サブカテゴリーで構成された。

8. 【看護師の体力の消耗を最小に】は、看護援助時の看護師の手技や基本的な留意点など、患者への配慮や工夫でなく、看護師のことについて記述した内容である。《援助時の看護師の安楽》《看護師の安楽に配慮したボディメカニクス》《看護師の安全のためのボディメカニクス》《援助時の作業効率》《援助時の効率性》の5サブカテゴリーで構成された。
9. 【看護計画の工夫】は、看護援助を行なうに当たり事前に考えた援助計画である。看護援助中に実施した内容は含まれていない。《個別性のある看護》《優先順位》《迅速な行動のための状況のイメージ》《援助は短時間で実施する》《患者の状態に合わせた物品の選択》《情報収集とアセスメント》《患者・看護師双方にとって良い看護援助を考えること》《基本的技術の習得》《患者の反応により臨機応変な対応》《丁寧な援助》《本来の看護援助が終わった際の患者への配慮》の11サブカテゴリーで構成された。
10. 【学び】は、看護援助そのものでなく、状況設定事例演習全体を通して学生が学んだことである。《グループでの学びに気付く》《他グループとの比較で自分達の援助を自己評価できる視点が育つ》《対象者にとって「最良」の看護を提供する意識》《全ての援助を看護師1人ですることの大変さ》《患者の思いを確認することで自分の看護は患者の立場に立っているという確信が持てる》《知識や技術は勉強すれば身につくが、心のケアの援助は経験が必要》《人にしか出来ない看護》の7サブカテゴリーで構成された。
11. 【演習で感じたこと】は、状況設定事例演習全体を通して学生が思ったことや感じたことなど感情を表わす記述である。《看護援助を考える自由度が増すことへの難しさ》《看護援助を考える自由度が増すことへの楽しさ》《患者の笑顔と感謝をもたらすケア》《他者に見てもらえた喜び》の4サブカテゴリーで構成された。

Ⅶ. 考 察

1. カテゴリーにおけるデータ数の比較

学生が大切だと思った援助の工夫や配慮のうち、【患者との意思の疎通】(42データ)が多く抽出された。《患者が安心するコミュニケーション》では〈羞恥心やもどかしさを感じているので、顔色をうかがい、声をかけて安心感を与えることも大切だと思った〉にみられるように、事例が尿失禁患者であることから気持ちを考慮し、患者が不快な気持ちでいるか、表情を観察したうえでコミュニケーションをとっていることがわかる。これは看護援助方法論Ⅰにおいて演習を行なう際、事例の年齢や簡単な病状など設定していたため、学生は患者役を体験していたことが反映されたと考えられる。また、援助を実施する際の留意点として毎回教授していることもあり、学生はこれまでの演習でも患者役に声かけをしながら援助を実施していたことも影響している。

次に多く抽出されたのは【自分の気持ちを患者に寄せる】(39データ)であった。《患者を思う気持ち》《患者の立場に立つ》《患者の目線に立つ》といった一般的に多用される表現のデータもある中、《患者の状態の観察》が13データと最も多かった。学生は、患者の思いに近づこうと状態の観察を行なっている。援助前から終了後にわたり患者の状態を観察することが根付いているといえる。また、《患者の持てる力は看護援助によって削がないこと》は〈対象に近づき動作に適した筋群が使えるところは使い、できるところは手伝ったりしながら行なった〉の1データであった。これは患者の状態を観察したときに、羞恥心だけでなく現在の体力も考えることができた看護である。患者の持てる力は活かして援助をすることが、結果的には生命力の消耗を最小にすることに気付いていたと考えられる。しかし1データのみであったため、このような思考ができるよう、今後の授業で伝えていきたいと考える。

3番目に多かったデータは【看護計画の工夫】および【看護を実施する際の基本的な配慮】(33データ)であった。【看護計画の工夫】は、《情報収集とアセスメント》《優先順位》《個別性のある看護》といった看護計画作成時に重要なポイントである。また、《迅速な行動のための状況のイメージ》《患者の状態に合わせた物品の選択》《援助は短時間で実施する》《患者の反応により臨機応変な対応》《本来の看護援助が終わった際の患者への配慮》といった看護計画を実施する際の患者への工夫や配慮にも気付いていた。特に《本来の看護援助が終わった際の患者への配慮》では〈援助の終わった後の声かけやお茶の提供など患者さんにリラックスしてもらう事〉と失禁の看護援助のみを考える学生が多いなか、その後の看護にまで配慮が至っている。患者は不快感が取り払われスッキリしただけでなく、お茶を飲むことでホッとリラックスするのではないかと考えている。これはメインの看護援助に付随した看護ではあるが、学生は、患者の立場に立ち、患者が嬉しいと思うことにも目を向けている。こういった学生の感性を拾い上げ、他の学生にも共有していきたいと考える。

【看護を実施する際の基本的な配慮】について、学生は《安全への配慮》《安楽への配慮》《安心への配慮》《準備性を高め患者が安心するケアの提供》《患者の自立促進》といった日常生活援助技術を実施する際に共通する配慮に気付いている。それまでの授業で学習した内容を想起し、活用できていたと考えられる。また事前課題で、対象の安全・安楽・自立を考えるよう提示していたため、学習を確実に行なった結果であることも考えられる。《羞恥心への配慮》《嫌悪感を与えない配慮》については、排泄に関する日常生活援助技術について学習した内容を振り返り、看護援助を考えられていた。【看護技術の工夫】【プライバシーの保護】【人間の尊厳を守る】についても、それまでの授業で学習した内容を想起し、活用できていたと考えられる。【看護を実施する際の基本的な配慮】【看護技術の工夫】【プライバシーの保護】【人間の尊厳を守る】のデータを合わせると85データとなる。單元ごとに共通する工夫や配慮といった既習の内容が状況設定事例演習で統合されて実施できた結果だといえる。

【看護技術の工夫】の《保温》では〈保温を怠らないように配慮しました。特に、最

後に罨法を入れたところは工夫した所だと思っています」というデータがある。これは【看護計画の工夫】にある〈お茶の提供〉と同様、看護援助後にも目が向けられている。学生は、尿失禁患者であるとともに代謝の低下が見られる老年期の患者であることに着目している。そのため、看護援助中は掛け物をかけ、肌の露出を最小にして保温に努め、患者が冷えを感じないように配慮し、温罨法を入れ保温が暫く続くように考えている。看護援助実施中に保温に配慮するだけでなく、実施後の患者への配慮まで考慮しているといえる。

また、カリキュラム改正案の基礎看護学の内容に強化している内容に「コミュニケーションを強化する」²⁾と「看護師として倫理的な判断をするための基礎的能力を養う」²⁾と挙げられている。【患者との意思の疎通】はコミュニケーションの内容、【人間の尊厳を守る】は倫理的な内容であり、これらの工夫や配慮も挙がっていたことは普段の演習でも留意するよう教授していた効果であると考えられる。

2. ナイチンゲールの看護の視点について

【生命力の消耗を最小に】は21データ、【看護師の体力の消耗を最小に】は10データであった。この記述用紙の設問には、「看護とは対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整える」⁸⁾というナイチンゲールの看護の視点を意識させる表現は含まれていない。にもかかわらず、31データであった。これは、事例が尿失禁患者である点、老年期の患者である点や、事前学習で生命力の消耗を最小にする看護を考えるよう提示していたことが影響していると考えられる。また、授業の開始にあたり「看護技術総論」を想起できるよう講義した影響であることも考えられる。この状況設定事例演習では、対象の状況設定が少ししか示されていない状態であった。このようななか、学生は初めて自分達で対象への看護を考える経験をする。学生は初めての経験に戸惑い、それ以前の学習を取り入れながら看護援助を考えることができにくいと予測された。そのため、学生が援助を考える際にナイチンゲールの看護の視点を意識できるよう、演習の前に講義を行なった。このことがナイチンゲールの看護の視点を意識でき、その視点が看護援助を考える際に活かされたことが効果としてあらわれたのではないかと考えられる。

【看護師の体力の消耗を最小に】の《援助時の効率性》では、〈手際よく行なえるように自分たちの中で防水シートともう1つの防水シートが隠れるように工夫して行ないながら、交換をしたことである〉にみられるように、看護師の効率を良くし、体力の消耗に気を遣っているが、そのことが結果的に患者の体力の消耗を最小にすること、すなわち患者の生命力の消耗を最小にすることにも繋がっている。これは、【看護計画の工夫】の《患者・看護師双方にとって良い看護援助を考えること》に3データあり、【看護師の体力の消耗を最小に】の10データと合わせると13データとなる。学生は、患者と看護師双方ともに生命力の消耗を最小にすることが考えられ、ナイチンゲールの看護の視点を念頭に置きながら援助を考え実施できる学生が、一定数いると確認できた。

3. 演習での学びについて

学生の【学び】は15データ、【演習で感じたこと】は12データであった。学生にとって、状況設定事例演習の授業は今回が初めてであり、自分たちで自由に看護援助を考えることや、グループで考えることで自分の考えが広がったというデータがあった。学生は意見交換をすることで学びが深まり、「総合演習」は前期のまとめとなり、効果が高いことが明らかであるとの報告⁹⁾がある。今回の経験は学生の学びの一つであり、大きな収穫だったことが考えられた。このグループダイナミクスの学びについては、今後の授業においても教授方法で取り入れていきたいと考える。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究は、対象数が少ないためデータに偏りがあることは否めない。今後も研究を重ね、授業に反映し学生により良い学びを提供していきたい。

VIII. 結 論

1. ナイチンゲールの看護の視点を取り入れた日常生活援助技術の状況設定事例演習で学生が学んだ内容は、【生命力の消耗を最小に】【看護技術の工夫】【看護を実施する際の基本的な配慮】【プライバシーの保護】【人間の尊厳を守る】【患者との意思の疎通】【自分の気持ちを患者に寄せる】【看護師の体力の消耗を最小に】【看護計画の工夫】【学び】【演習で感じたこと】の11カテゴリーであった。
2. ナイチンゲールの看護の視点を念頭に置きながら援助を考え実施できる学生が、一定数いると確認できた。
3. 状況設定事例演習は、自分たちで自由に看護援助を考えることや、グループで考えることで自分の考えが広がり効果がある演習方法であることが示された。

(引用文献)

- 1) 文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会報告書。 <http://www.umin.ac.jp/kango/Kyouiku> (2017年9月25日)
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書。 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2017年9月25日)
- 3) F.Nightingale：Notes on Nursing (初版)，1860，湯楨ます他訳，看護覚え書 (改訳第6版)，現代社，p.15，2000.
- 4) 竹内貴子，中島佳緒里，前田節子，他：看護実践能力を育てるための日常生活援助技術演習の展開，日本赤十字豊田看護大学紀要，9(1)，p.63-70，2014.
- 5) 高田まり子，堀内輝子，安川仁子：事例検討と学生の演習を組み合わせた演習の試み—1年次学生を対象にした点滴静脈内注射の技術演習—，北日本看護学会誌，10(2)，p.41-52，2008.
- 6) 清水恵子，萩原結花，村松照美，他：看護実践能力向上を目指した卒業時看護技術演習の取り組み—

- 「自己の課題シート」に見られた総合技術演習の修学状況一, 山梨県立大学看護学部紀要, 12, p. 43-52, 2010.
- 7) 一條明美, 神成陽子, 升田由美子: 看護技術学習のレディネス形成を目指した技術評価演習での学生の学び—1年次の状況設定課題終了後のレポート分析—, 旭川医科大学研究フォーラム, 13, p. 11-18, 2012.
- 8) 薄井坦子: 科学的看護論, (3) (新装版), 日本看護協会出版会, p. 28, 2014.
- 9) 杉本幸枝, 土井英子, 小野晴子: 援助技術演習「総合演習」の効果と方向性—演習後の学びに関する記述の分析—, 新見公立短期大学紀要, 26, p. 81-94, 2005.

(受付日 2017年9月29日)

(受理日 2017年12月6日)

Abstract

Objective : To describe in detail what freshman nursing students learned during a situation setting seminar of techniques for daily support.

Methods : The subjects were fifty-three students who gave written consent for participation. Using the reports submitted by the participants after the situation setting seminar, a qualitative and descriptive content analysis of what they observed and learned from the seminar was conducted.

Findings : The content analysis extracted 257 data, and 74 subcategories and 11 categories were generated. These 11 categories include 'all at the least expense of vital power to the patient,' 'well-thought-out nursing skills,' 'basic consideration for nursing care practice,' 'privacy protection,' 'respecting the human dignity,' 'mutual understanding between patient and nurse,' 'compassion toward patients,' 'all at the least expense of vital power to the nurse,' 'devising a nursing care plan,' 'acquired skills and knowledge in the seminar,' and 'thoughts on the seminar.'

Discussion : With their acquired knowledge, prior learning, and lectures provided before the seminar, nursing students were able to participate the practicum, being conscious of Nightingale philosophy of nursing.

Key words : Situation setting seminar
techniques for daily support
Nightingale's philosophy of nursing
nursing students